
原石とダイヤ

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

原石とダイア

【Nコード】

N7952G

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

何事も平凡な少年光臣はもててみたくて仕方がなかった。それで一念発起してもててみようとな努力した結果本当にもてるようになった。けれどそこで気付いて。恋愛は実際一人から真剣に思われた方がいいのかも知れません。

第一章

原石とダイア

「もてたいなあ」

江崎光臣は不意にこんな言葉を出した。

「やっぱり。もてたいな」

こうしたことを言う人間はもてない。世の中の絶対の摂理の一つである。そう、彼は生まれて十七年になるが彼女がいたことも告白されたことも全くないのだ。よくある話ではある。

クリスマスはいつも一人でバレンタインは義理チョコだけである。とにかくもてない。外見は一応普通で背も低くはないがどれも平凡だ。成績もスポーツも何もかもが平凡だ。そう、彼は完全な凡人だったのだ。

「あれ、江崎いたっけ」

「何時の間に？」

よくこんなことも言われる。

「御前とにかく目立たないからな」

「だから忘れた。悪い」

「あれ、一人多いつて思ったら」

「江崎君だったの」

このように忘れられるのもしょっちゅうだ。とにかく目立たないからもてないのだ。ある意味これ以上はない程に悲しい話である。

しかしそんな彼でもやはりもてたいと思うのだ。しかし思っているだけでは駄目だ。とにかく何かしなければ話にならない。そう考えていた矢先だ。

「うわっ」

家のソファでうつ伏せに寝て漫画を読んでいると急に背中に何かが乗ってきた。

「何なの！？いきなり」

「つてあんたいたの」

母親の声がした。

「気付かなかったわ、御免ね」

「お母さん……」

乗ってきたのは母親だった。乗ってきたというより背中に座ってきたのだ。彼が驚いた声をあげたのでそれでやっと気付いたのである。

「何処にいるかわからなかったのよ」

「何でなの？」

「だってあんた目立たないじゃない」

素っ気無い調子で彼に言うのだった。

「だからよ。御免なさいね」

「目立たないって」

彼はそのソファーから起き上がりながら向かい側のソファーに座る母親に対していささか抗議めいた目を向けながら言うのだった。

「お母さんまで言うの？」

「目立たないのは事実じゃない」

しかし母親はそのことを否定もしない。

「そうでしょ？じゃあ聞くけれどあんたこれまで目立ったことある？」

「ないけれど」

答えるその声がうんざりとしたものになっていた。

「それは」

「ほら、ないでしょ」

ここで母親の足元に家で飼っている猫が来た。銀のペルシャだ。

「サワディーちゃんだってあんたが御飯あげても気付かないでしょ」

「っていうか声かけられたことないけれど」

そのサワディーというペルシャ猫は母親の足に顔をすりすりと擦り付けている。実に猫らしい動作である。

「それって家だと」

「あんただけよ」

母親の言葉はここでも容赦がなかった。

「典子も帰ったら声かけられてるのに」

「お姉ちゃんまで」

彼には姉がいる。しかし大学進学で家を出て今は一人暮らしなのだ。その彼女ですら家に帰れば猫に気付いてもらえるのである。

「サワディーちゃんお父さんにも声かけるわよね」

「うん」

「やっぱりあんただけなのよ」

また息子に言うのだった。

「目立たないの。あんただけよ」

「兄貴は？」

彼には兄もいる。兄弟で一番上だ。

「部屋に籠って自分の仕事ばかりしてるけれど」

「何言ってるのよ、サワディーちゃんの世話してるの実朝よ」

「世話を？」

「そうよ。いつもしてるじゃない」

尚兄の仕事は漫画家である。そこそこ売れているらしい。

「それに外見もあんだとは違うし」

「目立ってっていうの？」

「顔はいいわよね」

実はその兄も姉ももてる方である。兄は漫画家という仕事柄家にいてばかりなので出会いは少ない。しかしその顔写真を見てそちらでもファンになる女の子すらいる。姉はずっと同じ彼氏がいてしかも大学まで一緒である。二人共そちらでも恵まれていた。

「あんたもね。顔はね」

「顔は？」

「普通ね」

いいとも悪いとも言わない。

第二章

「背もスタイルも。普通ね」

「普通なんだ」

「何もかも普通なのよね」

そう、本当に全てが普通なのだった。

「性格も勉強もスポーツもね。つまり全部平均なのよ」

「それが駄目だっていうの？」

「駄目も駄目、全然駄目よ」

我が子をこれでもかという程否定する。

「どうにもならないわね。これだったらモヒカンにしてバイク乗り回して騒いだ方がずっといいわね」

「そんなことしたら何処かの暗殺拳の伝承者にやっつけられちゃうじゃない」

「じゃあせめて世紀末覇者みたいに筋肉モリモリになったら？」

母親もよりによってとてつもない対象を出してきた。

「トレーニングでもして」

「トレーニングね」

「勉強もしてね。あとは」

「あとは？」

「ファッションとかヘアースタイルとか研究したら？」

このことも提案してきた。

「そういうのもね。どうかしら」

「外見もなの」

「中身も外見も」

母親が言うのはその両方に関してであった。

「どちらもよ。どうかしら」

「どっちもって」

「目立ちたいのよね」

「うん」

母親の今の問いにはすぐに頷いた。

「それで女の子にもてたいのよね」

「そうだよ」

今度はさらに正直に答えた。

「やっぱり。僕だつて」

「もてないと結婚できないわよ」

母親の言葉は実に容赦がない。まるで鞭だ。

「お母さんだつてお父さんに物凄いアプローチ受けたんだから」

「お母さんはもてたつてことね」

「そう、お父さんその時は結構いけてたし」

話に少しお惚気が入って来た。

「あの時はね。お兄ちゃんによく似ててね」

「そうだったんだ」

「今はお腹が出ちゃってるけれど」

しかしこつとも言つのだつた。

「残念なことに」

「昔は痩せてたんだ」

「そういうこと。だからあんたも」

とりあえず自分の夫のことは強引に話を終わらせた。

「格好よくなりなさい」

「格好よくね」

「そう、ジャニーズでもD・BOYSでも何でもいいわ」

さりげなくそういうのはチェックしているようである。

「格好よくなりなさい、目立ちたかったらね」

「わかったよ。それじゃあ」

ここは母親の言うことに従つてみた。ファッション雑誌等を買つて服装や外見をチェックして毎朝ランニングに筋トレをはじめた。勉強も頑張つてみてそれから暫くすると。周りから声をかけられるようになった。

「なあ江崎」

「今度暇か？だったら街行こうぜ」

最初はこんな感じだった。そして声をかけてきたのは男だけだったがそれはやがて女の子達からも声がかかるようになってきたのだった。

「ねえ江崎君最近変わった？」

「何かあったの？」

女の子の方がストレートだった。彼に率直に言ってきた。

「成績もあがったり体育でも活躍するようになったし」

「しかも雰囲気も変わったわよね」

「垢抜けてきたっていうか？」

彼に対して直接言うのである。

「明るくなっただし」

「髪型もお洒落になったよね」

「ちよっとね」

光臣はこの時はまだ苦笑いで彼女達に言葉を返した。

「髪、切ってね」

「それで変わったの？」

「それだけだよ」

照れ臭そうなその苦笑いで答えるのだった。

「本当にね。それだけだから」

「そうかしら」

「その割には随分変わったわよね」

「ねえ」

やはり女の子達の方が鋭い。見るべきものをちゃんと見ているのだった。

第三章

「けれどよくなつたわよね」

「ええ、なつたわ」

やはり本人を前にして話す。

「全然目立たなかったのにね」

「それがね」

「それは言われると」

正直言つて困つてしまった。それを気にして今努力しているからだ。しかしこれは言つてはいけないことも彼はよくわかつていた。

「ちよつと」

「よくなつたからいいじゃない」

「そうそう」

しかし女の子達はまだ言う。

「その調子でもつと格好よくなつたらいいじゃない」

「そうそう」

こんなことを言われた。これに気をよくしてさらに頑張つてみた。すると女の子達から余計に声をかけてもらえるようになった。男友達からもしきりに遊びに誘われる。

「今度の休みカラオケ行こうぜ」

「それどうよ」

「あつ、カラオケ!？」

実は流行の歌もチェックして勉強するようになっていたのである。

「じゃあ行く? いい新曲見つけたし」

「おう、じゃあな」

「行こうぜ」

遊ぶようにもなつた。それで世の中や遊び方も知つて余計に垢抜けた。外見はもう見違えるばかりでファッションは制服でも女の子の視線を常に受けるようになった。成績も鰻登りでいいこと尽くめ

だった。女の子達からはさらに声をかけられもてていると言ってもいい状況になった。そのことを家で母親に自慢げに話しもした。

「まずはよかったわね」

「うん」

以前母に腰掛けられてしまったあのソファーに座っていた。そこから夕食の後の洗い仕事をしている母親に対して言うのだった。

「声はかけてもらえるし」

「周りにいつも女の子がいるのね」

「こんなになるなんて思わなかったよ」

彼は上機嫌でその母親に言った。

「サワディーだってね」

ここであつては彼を空気にしか思っていなかったペルシャ猫が側にやって来た。そして彼の足にその顔を擦り付けるのだった。

「こうして寄ってくれるし」

「いいこと尽くめってわけね」

「うん。けれど」

「けれど？」

「何でかわからないけれど」

まずこう前置きした。

「ちよつとね。こんな感触っておかしいけれど」

「どうしたのよ」

「時々寂しいなっと思ってたりするんだ」

こう母親に話すのだった。首を少し捻りながら。

「ちよつとね」

「寂しい？」

「うん、おかしいよね」

洗うのあらかた終えて今度は食器を拭いている母親に述べた。

「こんなふう思うのって。今はいつも周りに誰かいてくれるのに」

「そうでしょうね」

だが母は彼のその言葉を聞いて当然と返すのだった。

「それもね」

「そうでしょうねって?」

「当然っていうことよ」

女の子達と同じようにはつきりと言ってきた。

「それも。当然よ」

「当然って?」

「だから。今そういうふうに思って余り前なのよ」

またしても我が子にはつきりと告げてきた。

「あんたの今の流れだとね」

「どういうこと?」

「ちよつと考えればわかるわよ」

食器を拭き続けながら述べてきた。

「ちよつとね」

「!? どういうこと?」

「この前話したと思うけれど」

今度はこう言ってきた。

「ちゃんとね」

「この前話したって」

「答えはそこにあるわ」

しかし今は答えのないのだった。だが意地悪ではなかった。

「そこにね。さて、と」

ここで食器を全て拭き終えた。

「終わったわ。後は」

「休憩ってこと?」

「紅茶がいい?それともコーヒー?」

「ココアある?」

彼が頼んだのはどちらでもなかった。第三の選択肢であった。

「ココア。それかホットミルクか」

「ココアならあるわよ」

返って来た答えは彼にとっていいものだった。

「それね」

「うん、御願い」

自分の膝に乗ってきたサワディーの相手をしながら応える。

「ココアでね」

「前は白湯ばかりだったのにね」

「こういうのも変わってきたのかな」

首を少し捻ってから述べた。

「やっぱり。飲むものも」

「そう思うわ。何かが変わったら全部変わっていくものよ」
母はそのココアを淹れながら彼に述べた。

第四章

「全部ね」

「そういうものなんだ」

「今やつとわかったみたいね」

ここでココアがはいった。すぐに盆に入れてそれを持って来る。

彼の分と自分の分、白いカップにそれぞれ入れて持って来た。

「そういうもののよ。何かが変わればね」

「全部変わっていく」

「今のあんたがそうじゃない」

また彼に対して話した。

「私から見てももう全然違うわよ」

「そんなになんだ」

「別人ね。ちょっと前まであんなに地味だったのに」

「三日会わなかったら、ってやつかな」

光臣はここで中国のある言葉を思い出した。

「人間は完全に変わってることもあるって」

「そうね。まさにそれよ」

「男子三日会わざればだったかな」

彼はその言葉を何となくが思い出した。

「カツモク!？」

「それよ。今のあんたがまさにそれね」

母は自分が淹れたそのココアを手にとって楽しげな顔で彼に述べた。

「本当にね」

「そうなんだ。それっていいことだよね」

「ええ、あんたが幸せならね」

いいというのだ。

「そうなるわ」

「そうなんだ。けれど」

だがここで彼は。その言葉を曇らせてきた。

「ちよつとね」

「ちよつと!？」

「うん、最近どうもおかしいんだ」

不意に言葉を曇らせるのだった。ココアを手にしてもそれに口をつけない。

「ちよつとね」

「どうかしたの？」

「男の子には遊びに誘ってもらえるし女の子はいつも何人が傍にいてくれて」

「最高じゃない」

「けれどね」

母の言う通りだがそれでもであった。

「ちよつと。どうかな」

「どうしたのよ」

彼の言葉がどうにも煮え切らないので問い返した。

「そんなふうでもまだ不満なの？」

「不満はないよ」

そうではないと答える。

「ただね。ちよつとね」

「ちよつと?」

「そういうのとはまた別にね」

人気があるのとまた別に、ということだった。確かに人気があるのはいいこととしたうえでだ。

「誰かいつもね。傍にいて欲しいかなってね」

「ああ、そういうことね」

母は彼の今の言葉を聞いて全てを察したのだった。それで納得した顔で頷く。

「あれよね。彼女が欲しいのよね」

「そうなるの？」

「馬鹿ね、他に何があるのよ」

包容力のある笑みを彼に向けて述べた。

「最初に言ったわよね。どうしてお父さんと一緒になれたのか」

「うん」

「お父さんが中身も外見も格好よかったからよ」

またこの話であつた。

「だからなのよ。だからね」

「僕もつてこと？」

「そうよ。あんたもね」

ココアを飲みながら彼に話すのだった。ココアから出る湯気がその顔にかかっている。

「そうじゃない。特別な人でもない限り彼女が彼氏が欲しいものよ」

「だったら僕も」

「そういうことよ。当たり前じゃない」

当然とまで言うのだった。

「それもね。だったら探しなさい」

「探すって彼女を？」

「ひょっとしたら向こうから来るかも知れないけれど」

明るい調子で彼に話す。

「そうしないと努力して変わった意味ないわよ」

「そういうものなんだ」

「わかったら彼女作りなさい」

このことを強調して告げた。

「いいわね。それもいい娘をね」

「うん」

ここでやっとココアに口をつけることができた。何はともあれ彼女を作ること、話はそれで結論が出た。しかし実際に何とかしようと思っただけでも今までそうだった相手がいなかったの何をしていいのかわからない。男友達、しかも彼女がいる人間にそれを何処と

なしに聞いても返事は曖昧なものだった。

「どうにかなるものなんだよな」

「どうにかって?」

「だからどうにかなるものなんだよ」

彼はこう光臣に言うのだった。

「どうにかな」

「それじゃあわからないけれど」

「気付いたらできてるんだよ」

彼の今度の言葉はこうだった。

「気付いたらな」

「気付いたらって」

随分と無茶苦茶な言葉だと思った。それを実際に言おうとするとそれより前に相手から言葉が返ってきたのだった。

第五章

「成り行きでできるものだな」

「だからそれじゃあ」

「できる奴はできるしできる奴はできない」

しかし彼の言葉は変わらない。

「そういうものなんだよ」

「できる奴はできるの」

「そのかわり。まあ今の言葉だけれどな」

「うん」

「できない奴は何をしてもできないぜ」

かなり残酷な言葉だった。少なくともその努力をしようとしている彼にとつては。

「どうしようもねえ屑でも結婚してたりするだろ？」

「それはね」

この場合人間としてという意味であつた。そうした人間が子供を作つて虐待等の問題を起こすことは昔からある。今その話も為された。

「それと逆に凄くいい人でもずっと独身だったりな」

「そういうのはまちまちなんだ」

「本当にわかつたもんじゃねえさ。まちまちだよ」

彼もまたまちまちという言葉を出す。

「だから俺はどうこう言えないんだよ」

「そつなんだ」

「悪いな。まあなつてくるもんさ」

彼はこうも光臣に話した。その時はこれまで少しばかり眉を歪めさせ眉間に皺を作つた顔になつていたが穏やかなものにその顔を変えていた。

「そついうのもな」

「なってくるものね」

「自分が動かなくても相手が動いてくれるしな」

「相手も」

「だから。まあなるようにしかならねえからな」

彼は言う。

「焦らないで色々やるべきだと俺は思うぜ」

「わかったよ」

今は彼の言葉に頷いた。なってくるものだと言われたが自分にそれが当てはまってくれるかというと懐疑的だった。そのままとりあえずそうした恋愛の本も読んだりしていた。どうなるかわからないが自分なりに頑張ってみていたそんな中のある日。学校に来て下駄箱を開けると。

「えっ!？」

思わず声をあげてしまった。そこにあつたのは何と。

一通の手紙だった。それが何かわからない程彼も無知ではなかった。そう、それだったのだ。

「嘘だろ!？」

思わず叫びそうになった。そんなことあればいいかな、とか夢みたいなことを考えていた矢先にこれである。最初これは悪戯ではないかと思つた。

「けれど」

しかし考えなおしてその手紙を読んでみることにした。とりあえず封を外からチェックしてカミソリやそういった類のものが入っていないことを確認してだ。彼も用心していた。

まずカミソリ等は大丈夫だった。そのことに安心してから誰もいない屋上に行つてそのうえで封を開いた。するとそこにあつたのは本物だった。

「まさか……」

読んでみてさらに信じられなかった。手紙には今日の放課後体育館裏で待っているとある。お決まりと言えはお決まりの展開であつ

た。

だがまだ疑っていた。今度も悪戯かと思ったのだ。それでまずは誰にも言わずそのうえで放課後に体育館裏の辺りがよく見える校舎の屋上のあるポイントからそこを見下ろした。自分をからかう為に誰かいればそこから見えるだろうと思つてそこから見下ろしたのだ。しかしそういつた人間はいなかった。仕掛けもない。そこには女の子が一人立っているだけだった。その娘がどうしてそこにいるのかはもう考えるまでもなかった。

「本当みたいだな」

ここに至つてやつとその考えになつた。そうしてようやくそこから下りて校舎裏に向かった。そこにいたのは小柄で可愛い女の子だった。

「あつ……」

「ひよつとしてあの下駄箱の手紙の？」

光臣は自分の顔を見て驚いた顔になつたその女の子に対して問うた。見れば顔は少しばかりふつくらとしているがそれでもかなり可愛い。髪の色は黒でロングヘアにしている。その娘がそこにいて彼を見て顔をあげたのである。

「あれはまさか」

「はい」

女の子は戸惑いを残したまま彼の言葉にこくりと頷いた。

「そうです。私です」

「そうだったんだ。君が」

「先輩」

実は彼は二年である。今の言葉からこの女の子が一年であることがわかる。

「私、前から先輩のことが」

「僕のことを」

「ずっと前からでした」

これは彼にとっては思いも寄らない言葉であつた。

「ずっと前からでしたけれど最近余計に格好よくなられて」

「ずっと前って!？」

まずこの言葉について女の子に問うた。

「あの、それって」

「はい、ずっと前からです」

顔を真っ赤にさせてまた俯いてしまってから彼に話す。

「ずっと前から先輩が好きでした」

「嘘………」

「嘘じゃありません」

女の子は今の光臣の言葉を全力で否定した。

「本当にずっと前からです。見てました」

「そうだったんだ」

以前のあまりにも地味な自分を見ていた。そのことに啞然としていた。しかしそれでも女の子の話は聞いてそれに応じていた。

第六章

「僕のことを。ずっと前から」

「それで」

女の子はさらに言う。

「あの、私でいいですか？」

「君でいいってことは」

「好きです。ですから」

こういうことであつた。当然ながら彼としては断る筈もなくこの言葉を受けた。こうして彼は彼女ができた。だが地味だつた自分を見ていたということは驚きでこのことも母親に話した。場所はやはりリビングで母はその話を笑いながら聞いていた。

「まずはよかつたじゃない」

「彼女ができたこと？」

「可愛い娘なんでしょ？」

こう彼に問うてきた。

「彼女ができてしかもそれが可愛い娘なんでしょ」

「うん、そうだけれど」

事実なのですぐに母に言葉を返した。サワディーを膝に寝かせてそのうえでガラスのコップに入れたコーラを飲みながら台所で洗いものをしている母に答える。

「だつたら最高じゃない。それでまだ何かあるの？」

「ありはしないけれど」

あるわけではないのである。

「ただね。それでも」

「それでも？」

「僕のことをずっと前から見ていたなんてね」

コーラを飲んだ後で顔を見上げて言う。

「あの地味だつた僕に」

「けれど格好よくなったから告白されたのよね」
「それはね」

それもその通りであつた。

「けれど。あの時の僕も見えていたんだ」

「お母さんもそれはないだろうと思ってたわ」

何と母もそれは同じだった。

「けれどよかつたじゃない」

「よかつたの？」

「あんたその娘で満足してるでしょ」

「満足しないわけじゃない」

彼は少しムキになった調子で言葉を返した。女の子が周りにいるようになつても寂しいものを感じてもいた。それがどうしてかもわかつてそれで今その彼女ができたのだ。それで満足していない筈がない。

「それはね」

「そうよね。けれどもでもなのね」

「あの時の僕を見ていたなんてね」

今度は首を捻つての言葉だった。

「そんな筈ないって思っていたけれど」

「つまりこういうことね」

母は洗いものを終えて今度は食器を拭いていた。丁度ガラスのコップを抜いている。

「ダイヤモンドあるわよね」

「うん」

「ダイヤは最初から輝いているわけじゃないのよ」

よく言われる言葉だがこの母も今そのことを言うのだった。

「磨いて磨いて。それで輝くようになるのよ」

「つまりあれ？」

光臣も当然の如く母が何を言いたいのかわかった。この話が出れば誰でもわかる。

「あの時の僕は原石だったってこと？」

「そういうことよ」

そのことを実際に彼にも話す。

「あんたは原石で」

「うん」

「その娘はその原石がダイヤだって見抜いていたのよ。最初からね」

「そういうことだったんだ」

「それでダイヤになったあんたに告白した」

コップを拭きながら話す。

「そういうことね」

「そうだったんだ。それで僕に」

「ダイヤになった気分はどうかしら」

くすりと笑って我が子に問うてみせた。

「中見も外見も何もかもそうなった気分はどうかしら？」

「彼女もできたし嘘みたいだよ」

笑ってこう語った。

「本当に最高だよ」

「そうでしょうね。けれど」

「けれど？」

「お母さんもここまでなるとは思わなかったわ」

またくすりと笑って言うのだった。

「あんたがここまでよくなるなんてね」

「そうだったんだ」

「ダイヤは磨き続けないと駄目よ」

これはダイヤを人間と見ての言葉だった。

「わかってるわね。だから」

「これからも努力してってこと？」

「その通りよ。わかったらこれからも頑張りなさい」

あらためて自分の息子に告げた。

「いいのね」

「わかったよ。それじゃあね」

光臣は母のその言葉に頷いた。

「これからもね」

「原石は磨かれてダイアになるけれど」

母親として我が子のことを思いながらの言葉だった。

「けれど。元からダイアなのかもね。輝いていないだけで。そして磨き続けていないとダイアであり続けはしないのかしら」

こう考えるのだった。その言葉を聞く光臣の膝元ではperlシャ猫のサワデイーが眠そうな顔をしていた。そうして大きく欠伸をして彼のその膝元で眠りに入った。

原石とダイア

完

2009・2・28

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7952g/>

原石とダイア

2010年10月8日15時50分発行